

令和5年7月 25 日

令和5年度 伊豆市議会総務経済委員会 行政視察報告書

総務経済委員会 黒須 淳美

「視察先」	「目的」
7月12日(水)宮城県東松島市	<u>震災復興後のまちづくり</u>
7月13日(木)岩手県矢巾町	<u>フューチャーデザインによる水道料金の改定</u>
釜石市(株)かまいし DMC	<u>震災復興後の持続可能な観光地づくり</u>
7月14日(金)岩手県盛岡市	<u>「2023年に行くべき52カ所」に選ばれたまちづくり</u>

震災復興後のまちづくり

東松島市：人口 38,683 人 面積 101.30 km² (平成17年 2 町合併)

*東日本大震災で甚大な被害を受けたが「復興のモデル市」を目指した取りくみによりハード事業の復興は完了、今後は心の復興を進めていく

*三大三景「松島」と航空自衛隊松島基地(ブルーインパルス)

仙台駅から野蒜駅へ向かう仙石東北ライン快速は「ハイブリッドトレイン」で車両の上にバッテリーを乗せ、停車中は社内の液晶パネルに車体の絵と共に「充電中」の表示がされていた。右手に伊豆とは異なる海の風景を見ながらの30分ほどで新しい野蒜駅へ。

盆栽をテーマにした奥松島クラブハウスへ行くと、東松島市復興政策部復興政策課職員のみなさまの出迎えを受け、復興支援で伊豆市から派遣された職員の近況などから話が弾み災害時支援の大切さを改めて感じた。

職員の方の説明から震災後の住民の居住場所の変遷について、8年くらいで全員がそれぞれ恒久住宅へ移転を完了したとのことで、その大きな理由として2009年から始まった地域自治組織の体制があるとのことだった。

被災時、各市民センターを避難所にし、その運営を地域自治組織が担い、また内陸部の自治組織がそれらを支援するという連携も生まれたとのこと。

伊豆市でも災害時の避難所運営についてはこのような形が望ましいしそのための体制について整えていく必要を感じたが、これには区単位と地域づくり協議会などの組織の連携をどうしていくかを検討すべきと思った。

もう一つ特記したいことは、災害ごみの処理についてである。

奥松島クラブハウスから歩いて直ぐの東松島市震災復興伝承館に隣接する震災遺構 JR野蒜駅の線路は押し寄せた 3.7m の津波を受け拉げていたが、この震災により市全体で109万トン以上のがれきが発生したとのこと(野蒜地区は10.35mだったがここは海岸との間に運河がありその構造により3.7mに)。これは東松島市で発生する110年分の一般廃棄物の量と聞き想像を絶する惨状だったことを思う。

その処理方法についてはその後「東松島方式」として環境省からも高く評価され、以降地震災害においてなど各地で採用されているようだ。

それではどのように東松島市では気の遠くなるような災害ごみを処理したのか。

やり方としては、すぐにも現地からがれきを撤去するために仮置き場へ搬送したいところだが、東松島市では先ず現地において14品目に分別してから仮置き場へ搬送、その後さらに19品目にまで分別した。

この分別作業にあたったのは被災した市民で、これにより大量の雇用が生まれ、このことで最終的に 99%をリサイクル。処理単価が宮城県内でも一番低い結果となったことを伝承館で案内してくださった地元の方が誇らし気に話してくれました。

このことから災害ごみの問題について昨年9月定例会で一般質問したこともあり、伊豆市でもその後どのように進められているか気になったところです。

分別作業や手順を明確にすることで市民の不安解消にもつながり、加えて経費の抑制そして環境面でもリサイクルの向上にもつながることを考えると今後の取り組みへの提言などに活かしたいと思いました。

フューチャーデザインによる水道料金の改定

矢巾町：人口 26,428 人 面積 67.32 km²

*水道は、1966 年に供給を開始し、現在普及率が 96%(2019年資料)

*2009年 1 月水道サポーターワークショップ(WS)開始

*2012年 3 月ワークショップ参加者から料金改定の提案

(更新積み立て 200 円)

*2015 年度水道事業経営戦略策定でフューチャーデザイン(FD)を実施

(料金の値上げ、水道管の更新サイクル70年等)

宿泊先である県庁所在地の盛岡市を車で出て、その南に隣接する矢巾町に入ると長閑な田園地帯という印象だったが、そこで取り組まれてきた施策は先進的であり、担当者の「国の水道ビジョンは矢巾町の取り組みが基になっている」との言葉には、水道サポーターWS 開始からの取り組みについての自負と強い思い入れを感じた。

「フューチャーデザイン(FD)」という初めて耳にする言葉に下調べはしたものの、当日の担当者の開口一番が「メディアに取り上げられているが、その中でも『どうかな?』というものが多々あるのでその辺も含めながら説明する」という言葉がずっと気になり、その視点から話を聞くことになったが、これは正に「百聞は一見に如かず」、視察で現地を知ることの意義を改めて認識する場面となった。

先ず、水道料金改定について始めからFD を取り入れていたわけではなかったこと。職員が「机上で考えていても住民の意識は把握できない」と、アウトリーチという手法で町へ出ていき1,000人へアンケート、954名から回答を得ることができ、その結果を集計した後、水道サポーターWS へとつなげていった。

そのWS では、浄水施設見学や利き水体験などといった体験型WS も開催し、「これが壊れたら2,000万円かかる」など一歩踏み込んだ情報や、参加者(住民)の思い込みなどに気づけるような工夫が凝らされている。このように回を重ねる毎に、短期的な「料金値上げ反対」という私的な考えから、長期的ないわゆる公共の利益を選ぶような考え方に変化していき、4年半かかったが「施設更新積立 200 円」という結論に到達した。

その後2015年「まち・ひと・しごと創生総合戦略」や「公共施設等総合管理計画」の策定にあたって初めてFD を実践することになるが、水道事業におけるFD 実施はこの直後であった。

担当職員の方が何度も口にしていた「知ることで自ら学ぶようになり、その学びが楽しみになる」という言葉、そして一方的に行政から「知らせる」のではなく住民が「参加」することで行政と住民の双方向コミュニケーションが成立し、そのことが住民の満足度と共に成長へとつながるものと感じられた。

人口減少などから今後求められる持続可能な地域づくりを考えると、これからは行政主導型という考え方ではなく住民自ら参加し考え行動していく、そんな場作りが伊豆市でも増えていくことが重要と感じた。そして行政に対しては職員の専門性の育成、またリスクリングなどへの取り組み強化を進めることが必要と感じた。

震災復興後の持続可能な観光地づくり

釜石市：人口 30,279人 面積 440.35 km²

*「鉄と魚とラグビーのまち」

*1858年に日本で最初の洋式高炉を建設し銑鉄の精錬に成功した近代製鉄発祥の地

*東日本大震災によるハード面の復興・復旧は概ね終了

釜石市内に入り海岸に近づくにつれ建物の壁に青色の看板が目につくようになる。

2011年3月11日の津波がこの高さまで来た、という表示である。

目的地の釜石市魚市場に隣接する「魚河岸てらす」近くの建物の壁を見上げると2階の天井部分辺りにその看板が見えた。とてつもない高さである。

魚河岸テラスでは、2018年に設立された「株式会社かまいし DMC」代表取締役の方からお話を伺った。この企業には釜石市役所から総務企画部長と産業振興部長の2人が取締役として出向している。釜石市が観光振興ビジョンとして掲げている「オープン・フィールド・ミュージアム釜石」という構想を実現することが最大の役割であること、そしてその手段として世界持続可能観光協議会(GSTC)基準を取り入れている。

この「オープン・フィールド・ミュージアム(OFM)」は「東日本大震災で荒廃した釜石の復興のため、地域の文化・自然・施設・住まう人々・生業を「展示物」と見立てて、まち全体を「屋根のない博物館」として有機的につなぎあわせることで、教育旅行や企業研修・ワークショップの受け入れを促進するものとの説明があった。

そこに住む人やその生業(仕事)が「展示物」という考え方に最初は戸惑ったが、説明が進むうちに少しずつ理解ができてきた。

例えば「海」に目を向けたとき、大型のクルーズ船を新しく購入するのではなく、今まで観光に携わっていなかった漁師たちにその漁船を使って観光客を案内する、またアカデミックな面でもマイクロプラスチックについて学ぶなどの広がりから、関わる住民たちが観光客からの反応を受けて釜石の魅力を見出すことになり、この地で住むことの誇りの醸成になっているそう。他にも「震災伝承・防災教育館」などでは企業のリスクマネジメント研修や防災プログラムを全編英語化しインバウンド受け入れもしている。

様々なタイプのプログラムが用意され、この OFM の展示物から実際に学び体験するという形がこれからの観光の大きな魅力となっているのを実感した。

単に観光客のみならず、それを提供している住民の満足度にもつながるというところが伊豆市でも取り入れたいところだと思った。ただ世界持続可能観光協議会(GSTC)基準はかなりハードルが高いと思うので伊豆市に合ったやり方も考えるべきだと感じた。

「2023年に行くべき52カ所」に選ばれたまちづくり

盛岡市：人口 284,054人 面積 886.47 km²

*盛岡市役所の裏ではサケが遡上する川があり、アユの放流もされている

盛岡駅を出て街並みに目をやるとビルなどの大きな建物もあるが、緑が多く落ち着いた雰囲気です。既に居心地の良さに包まれ気ままに歩いてみたいと思わせる街だった。

2022年10月ニューヨークタイムズ紙に「行くべき52カ所」の推薦依頼を受けた鎌倉市在住の作家で写真家のクレイグ・モドさん、この時直ぐ頭に浮かんだのが2021年に初めて訪れた盛岡市だったそうだ。

その理由として彼はこう書いている。「僕が街に求める基本的な要素を持っている。善良な人たちが、生き生きと暮らしているということだ。」

このシンプルな言葉に拍子抜けの感もあったがそれこそ現地を訪れ実際に取り組んでいる人たちの声を聞くことが必要だった。

市役所では交流推進部観光課の職員の方が対応してくださり、先ず「伊豆市の方が観光の取り組みは強いというイメージがある」との言葉に、お互い遠く離れた自治体同士ではあるが「あなたのことを知っていますよ」というメッセージに一気に氷が解け距離感が縮まるような気持ちになったのを覚えている。こんなところにもヒントがあるのかもしれない。

さて、一番聞いてみたかった「実際に選ばれた感想は？」には「『何でうちが？』と驚いている」との返答も正直なところだろう。続いて「評価された点をどう捉えているか？」には「400年の歴史、街並みが残っているところ、そして風土や文化、人」を挙げていた。「人」については「奥ゆかしく、恥ずかしがりなところも居心地よいのでは」という分析だった。

盛岡駅周辺を中心市街地の活性化には勿論力を入れてきているとのことだったが、そこに息づいている歴史、風土、文化などが醸し出す街の佇まいを生かし、そしてそれを受け継いでいく若い世代がいる、ということも大きな要因ではないかと、街をいく若者の多さを見て感じたものだった。

市内には100年以上の歴史ある南部鉄器の老舗工房や、江戸時代から明治にかけて建造された商家建築、そこに19世紀末から20世紀初頭に建てられた洋風の当時近代的な建物の風景が違和感なく溶け合う歴史の厚みが、豊かな緑と穏やかな川の流れと相まって表層だけでない日本の深いところに観光客を誘うのだろうと感じた。

翻って伊豆市はどうだろうか。観光に力を入れているイメージがあると盛岡市職員の方から評価されはしたが、実際に訪れる観光客はどのような伊豆を見ているのだろうか。

自分の少ない経験からだが、やはり伊豆は盛岡市にも劣らない歴史や風情を有していると誇れるし、実際観光施設や歴史に触れる場所のみならず元からある美しい緑や狩野川、天城連山などの風景を目当てに何度も訪れてくださる方が多いのも事実である。

そこで更に伊豆市に必要なものは何かと考えたとき、クレイグ・モドさんがいみじくも見抜いた「善良な人たちが、生き生きと暮らしている。」という視点だろうか。「伊豆のどこがいいの？」と外部の方に謙遜するのではなく、受け継いだものの価値を正當に評価し、地域の人たちが生き生きと生業に精を出す、至極当たり前のことをしっかりやっていくことかもしれない。そのためにも地域の活性化をどう生み出していくかももう一度違う視点から考える貴重な機会となった。